

Title	焦点構造における繫辞の統語的分類
Author(s)	中野, 晃希
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91463
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

焦点構造における繫辞の統語的分類

中野晃希

1. はじめに

本稿では、特定の焦点構造に見られる繫辞の派生に関して、その統語的性質を分析する。特に、これまで盛んに議論がなされてきた間接疑問文縮約における繫辞の任意的派生を中心に分析を行う。以下が間接疑問文縮約である (cf. 井上 1978)。

- (1) 太郎が何かを買ったらしいが、
- a. 僕は[何をか]知らない
 - b. 僕は[太郎が何を買ったか]知らない
 - c. 僕は[何を(だ)か]知らない

先行文に続いて (1a) では、埋め込み節における疑問詞のみが発話されているにもかかわらず、埋め込み節が全て発話されている (1b) と同様の解釈が得られることが確認されている。間接疑問文縮約では (1c) のように、任意に繫辞が派生可能であることが確認されており、本稿では、この繫辞が統語的にどのように分類されるのかを分析していく。2 節では、間接疑問文縮約を含む繫辞が生起する焦点構造を概観する。3 節でその特定の焦点構造に現れる繫辞が、通常の繫辞文に生起するものと同一であることを議論し、4 節でその分類に基づいた焦点構造の分析を提案する。具体的には、以下のように繫辞が上位の節における述語を為す、埋め込み節内の二重節構造を提案する。

- (2) 僕は_{[CP} 何を₁ [_{VP} [_{IP} 太郎が_{t₁} 買ったの]_{t₂}] (だ)₂]か]知らない

間接疑問文縮約において残置される WH 句が埋め込み節頭へと移動し、任意の繫辞を残して繫辞の補部をなす埋め込み節が削除されている。特に、繫辞が機能範疇に生起する要素ではなく述語であると分析することによって、ここでは動詞句の省略現象が生じていると主張する。

2. 焦点構造

間接疑問文縮約は当初、その構造的な近似から、英語において観察されていた *sluicing* と同様の分析が提案されていた。

*本稿に関して、査読者、LCCC 研究会の皆さまから多くの有益なコメントをいただきました。この場で深く感謝を申し上げます。本稿の内容に関する不備は全て筆者によるものです。

- (3) He is writing something, but
 a. you can't imagine [what].
 b. you can't imagine [what₁ [~~he is writing t₁~~]] (Ross 1969)
- (4) 太郎が何かを買ったらしいが、
 a. 僕は[何をか]分からない
 b. 僕は[何を₁ [~~彼が t₁ 買った~~]か]分からない (Takahashi 1996)

英語の sluicing は、(3b) のように WH 移動により疑問詞を抜き出し、残った埋め込み節が省略されるという分析であり、Takahashi (1996) では、日本語においても同様の操作が (4b) のように適用されると主張している。しかし、その後の研究において、以下のような用例が指摘され、WH 移動分析では問題となると言う点が指摘されている。

- (5) 任意繫辞 (Nishiyama et al. 1996)
 みんなはジョンが誰かを愛していると言ったが、
 a. 僕は[誰を(だ)か]分からない b. 僕は[誰を[ジョンが愛している](*だ)か]分からない
- (6) 非 WH 句の縮約 (Shimoyama 1995)
 ジョンが誰かを首にしたらしいけど、
 a. 僕は誰を(だ)か知らない b. 僕はビルを(だ)かどうか知らない
 c. 僕はビルを(だ)と思う

まず、(5a) のように報告されている、繫辞の任意な派生が許容されるデータでは、WH 移動分析を適用してしまうと、その基底構造では繫辞の派生は(5b)のように許されないため、非文からの派生を仮定してしまう。また、(6b, c) では非 WH 句である「ビルを」が残置されていることに加え、疑問の補文標識ではない「かどうか」「と」の使用が許容される。WH 移動分析という名の通り、英語ではこれら非疑問表現は全て許容されない。そこで、Shimoyama (1995) によって、間接疑問文縮約は分裂文から派生されるという分析が提案されている。

- (7) 分裂文分析 (Shimoyama 1995)
 ジョンが誰かを首にしたらしいけど、
 a. 僕は[ジョンが首にしたのが]誰を(だ)か知らない
 b. 僕は[ジョンが首にしたのが]ビルを(だ)かどうか知らない
 c. 僕は[ジョンが首にしたのが]ビルを(だ)と聞いた

上記のように、分裂文が埋め込み節に存在し、その前提節が削除されていると考え、日本語の間接疑問文縮約における繫辞の派生も、非 WH 句の派生も説明が可能である。さ

らに、Hiraiwa and Ishihara (2012) において、分裂文に関しても、その基底構造が以下のように存在すると提案されている。

(8) a. ノダ文 (基底構造)

僕は[太郎が何を買ったのだから]知らない

b. 分裂文

僕は[_{TopP} [_{FinP} 太郎が t_1 買ったの]₂-は [_{FocP} [何を]₁ t_2 (だ)]]知らない

(Hiraiwa and Ishihara 2012)

埋め込み節が (8a) のようにノダ文になっており、WH 句の焦点移動による抜き出しと、その残置句の主題化によって、分裂文が派生していると分析している。

本稿でもこれら繫辞を伴って生起する焦点構造には連関があると仮定し、以下の構造を中心に分析を行っていく。

(9) 太郎が何かを買ったらしいが、

a. 間接疑問文縮約

僕は[何をだ]知らない

b. 分裂文

僕は[太郎が買ったのは何をだ]知らない

c. ノダ文

僕は[太郎が何を買ったのだから]知らない

まず、3 節ではこれら焦点構造に生起する繫辞の分析を行い、4 節でその焦点構造自体の分析を提案する。

3. 焦点構造における繫辞

焦点構造における繫辞の分類は、分裂文を対象とした研究において詳細に行われている。日本語の分裂文には、移動分析と基底生成分析という異なる分析の仕方が提案されている。本節では、この先行研究で提示されたどちらの分析をとったとしても、分裂文における繫辞は、繫辞文における繫辞と同一の機能投射 (述語位置) に生起しているという分析になることを確認する。

(10) 移動分析 (cf. Hiraiwa and Ishihara 2012)

a. のだ文

太郎がリンゴを食べたのだ

b. 焦点移動と主題化

[_{TopP} [_{FinP} 太郎が t₁ 食べたの]₂-は [_{FocP} [リンゴを]₁ t₂ だ]]

(11) 基底生成分析 (cf. Hoji 1990, Matsuda 1997, Saito 2004, Kizu 2005)

[_{CP1} Op₁ [_{IP} 太郎が t₁ 食べた]の]-は [_{VP} [_{PP} [_{Focus} リンゴを]₁ で] ある]

移動分析では、(10a) に見るようなノダ文を基底として、焦点要素の抜き出しとその残置句の主題化によって (10b) のように分裂文が派生されると分析している。そして、繫辞は FocP の主要部に位置する機能範疇であると考えられており、通常の繫辞が文法化したことにより CP 領域に生起していると仮定している。一方、基底生成分析では、分裂文は前提節である主題から操作子 (Op) が抜き出され、焦点句である「リンゴを」を束縛するという考え方をとする。この時、繫辞は通常の繫辞文と同じく述語であり、焦点句を姉妹位置に持つ VP の主要部に生起している。繫辞の派生に関しては、先行研究に従い、「である」の音韻的縮約形が「だ」になると本稿でも仮定する。まず、(12) のように「だ」と「である」は基本的に同じ環境での派生が観察されている。²また、この分析は、(13) のように介在要素を繫辞内に挿入することで縮約不可能になるという事実とも整合的である。

(12) a. 太郎は学生{だ/である}

b. 太郎は頑固{だ/である}

(13) 太郎は本を読んだの{だ/である}

(Kizu 2005)

(14) a. 夜が静かでもある b. *夜が静かだも(ある)

(Nishiyama 1999)

また、繫辞が述語であるとして詳細な構造を提案している Kizu (2005) では、(15) のように「である」が後置詞句「で」と動詞「ある」から構成されていると仮定している。このことは、(16) の多重焦点文が非文法的であるとの判断によるもので、繫辞がその補部に複数の要素を持つことができない事実を説明するために、「で」が単一要素のみを選択可能な後置詞句であると提案している。

(15) [_{VP} [_{PP} [_{Focus} X] で] ある]

(16) 太郎が送ったのは[花子に本を]だ

(Kizu 2005)

近年の研究では、多重焦点文は容認可能とされ、通言語的にも近似した現象が観察されて

² 査読者から、繫辞「だ」は埋め込み節には生起できないとのコメントをいただいたが、埋め込み節内の繫辞には生起可能な場合があり、主節現象 (cf. Hooper and Thompson 1973) が観察される特定の動詞や節を用いた際には、文法的であることが観察されている (e.g. 中野 2021)。

いることから、本稿でも容認可能であるとの判断を採用する。すると、一見 Kizu (2005) の分析では多重焦点文を説明できなくなってしまうように思えるが、多重焦点文の分析からも (15) の仮説は支持される。Takano (2020) では、(17) のように単一焦点文に観察される島の現象が、多重焦点文では観察されないことを説明するために、Hornstein (2001) の側方移動を採用して以下の分析を提案している。

(17) 島の制約 (Takano 2020)

a. 単一焦点

??健が_[Complex-NP-Island] マリが本をあげたという噂を]信じているのは正男にだ

b. 多重焦点

健が_[Complex-NP-Island] マリがあげたという噂を]信じているのは本を正男にだ

(18) Double sideward movement 分析 (Takano 2020)

健が[マリがあげたという噂を]信じているのは正男にだ

a. SO1 = [VP 本を正男にあげた]

b. SO1 = [VP t₁ t₂ あげた] SO2 = [本を₁ 正男に₂]

c. SO1 = [健が[マリが t₁ t₂ あげたという噂を]信じているのは] SO2 = [本を₁ 正男に₂]

d. SO1 = 健が[マリが t₁ t₂ あげたという噂を]信じているのは[本を₁ 正男に₂]₃ だ

SO2 = [t₃]

まず、(18a) の VP が組み上がった段階で、(18b) のように名詞句「本を」と「正男に」が別の SO (Syntactic Object) へ側方移動される。その後、(18c) で通常の焦点句が挿入されるタイミングで、SO2 が外的併合 (External Merge) することにより、島の現象を引き起こしてしまう移動 (Internal Merge) を伴わずに多重焦点文が派生していると説明できる。ここで、SO2 が (18d) のように通常の併合と同様に行われるということは、外的併合される名詞句は構造的には単一要素であることを意味する。つまり、多重焦点文において焦点句位置に複数の名詞句が存在していようとも、SO2 の名詞句「本を正男に」は全体で単一の構成素として外的併合されることになる。すると、一見 Kizu (2005) で誤って非文法的であると予測してしまっていた多重焦点は以下のように後置詞「で」を伴っていたとしても問題なくなる。

(19) 太郎が送ったのは[VP [PP [single-constituent 花子に本を]で]ある]

ここまでの議論から「で」が後置詞である可能性も残り、基底生成分析における繫辞は「(P⁰ +) V⁰」、つまり述語であり、通常の繫辞文と同様の要素であることになる。

次に、移動分析における繫辞の分析を概観する。Hiraiwa and Ishihara (2012) では、分裂文にもその基底構造が存在し、ノダ文から派生していると分析しているが、ノダ文に生起す

る繫辞が通常の繫辞とは異なることを示す証拠として、以下の時制の一致の有無に関する対比が挙げられている。

(20) 時制の一致 (Hasegawa 2011, Hiraiwa and Ishihara 2012)

- a. 昨日太郎が病気{*だ/だった} b. 昨日太郎が何かを買ったの{だ/だった}

繫辞文であれば (21a) のように時の副詞「昨日」との一致を見せることが観察できるが、ノダ文ではその一致が全く見られない。このことから、ノダ文における繫辞は時制よりも高い位置である CP に生起すると仮定している。しかし、ノダ文の繫辞が IP 内に留まることを示すデータも、次のように報告されている。

- (21) a. *[_{CP} 太郎が来ただろう]そうだ b. *[_{CP} 太郎が来ました]そうです
c. *[_{CP} 太郎が来るね]そうだ d. [_{IP} 太郎が来たのだ]そうだ (森山 2021)

これは、その補部に IP を選択するモーダルの「そうだ」を用いたテストで、(19a-c) のように、通常「そうだ」は CP 領域に生起するモーダルや敬語表現、終助詞に後続することはできないことが観察できるが、(19d) でノダ文には後続することができている。つまり、ノダ文が少なくとも CP より下の IP 領域に生起していることを示す。さらに、Terada (1993) で報告されている以下の否定極性表現「しか」を用いたデータを考えることで、ノダ文が二重節構造を持っていることが確認できる。

- (22) a. 太郎は生肉しか食べなかった
b. *花子は[太郎が生肉しか食べたと言わなかった]
c. [太郎は生肉しか食べなかった]のだ
d. *[太郎は生肉しか食べた]のではない (cf. 太郎は生肉を食べたのではない)
e. [_{IP/VP} [_{IP} 太郎は生肉しか食べたの]]ではない

否定極性表現である「しか」は (22a) のように否定辞「ない」によって節内で束縛されている必要があり、(22b) のように節外からの束縛では非文となる。(22c) ではノダ文内に生起する動詞に否定辞が後続していれば容認できるが、(22d) においてノダに後続する否定辞では非文法的になる。ここではノダはノダの異形態という前提に立っている。このことから、(22e) のようにノダ文は二重節構造を持っていると考えられる。すると、CP 領域に繫辞を仮定しなければ説明ができなかった先ほどの時制の一致に関しても、ノダ文が二重節構造を持っていると考えれば、時の副詞が主節にあるか従属節にあるかの違いによって説明が可能になり、繫辞文と同様の述語位置に生起する繫辞のみでの説明が可能になる。モーダルとその関連要素を節境界に入れた (23a) では、主節と埋め込み節の境界が明示的に

なっており、そこでノダ文の繫辞が時制の一致を見せている事実は、この分析と整合的である。

- (23) a. 昨日どうも太郎は本を買う{つもりな/?ような}の{*だ/だった}
b. [(昨日)](昨日) 太郎は何かを買ったの]{だ/だった}

二重節構造を考えると、主節でのみ「昨日」が生起できる (23a) では先ほど観察されなかった時制の一致がのだ文においても観察することができる。つまり、(23b) のように主節であっても埋め込み節であっても解釈可能な位置に「昨日」が生起していたことによって、ノダ文に時制の一致が見られなかったことになる。ここまでの議論から、移動分析における繫辞、つまりノダ文における繫辞に関しても、述語位置に生起していると考えられる。

本節で概観した基底生成分析であっても、移動分析であっても、そこで観察される繫辞は、繫辞文における繫辞と同一の要素であることがわかった。つまり、ノダ文、分裂文ともに繫辞は述語であり、そこから派生される間接疑問文縮約における繫辞に関しても、述語位置に生起していると考えられる。

4. 間接疑問文縮約の構造

本節から、繫辞が述語であると仮定した上で、間接疑問文縮約の構造を提案する。まず、埋め込み節内において繫辞に任意な派生が可能であるという点から、Hiraiwa and Ishihara (2012) に従って、ノダ文を基底構造と考える。その上で、以下のように、ノダ文から直接間接疑問文縮約が派生していると提案する。

- (24) 僕は_{[CP} 何を₁ [_{VP} [_{VP} ~~太郎が~~ _{t₁} 買ったの] _{t₂}] (だ)₂] か] 知らない

ノダ文であっても、WH 移動分析で問題となっていた任意な繫辞や非 WH 句の派生は可能であることに加えて、Nakamura (2012) によって、分裂文が非文法的であるにも関わらずそこから派生すると考えられている間接疑問文縮約が文法的となることが以下のように報告されている。

- (25) a. ノダ文

健が[マリを可愛く]思ったのだ

- b. 分裂文

*健が思ったのは[マリを可愛く]だ

- c. 間接疑問文縮約

健が[咲を可愛く]思ったらしいが、僕は[マリを可愛く]だと勘違いしていた

ノダ文であれば、(25a) のように焦点部分に小節をとることが可能であるのに対して、分裂文では (25b) のように容認不可能である。この際、間接疑問文縮約では (25c) のように容認可能となっていることから、その基底構造に非文法的な分裂文があるとは考えられない。そこで、本稿では (24) のようにノダ文から直接間接疑問文縮約が派生していると考え。この分析は、主題位置のみを削除可能な分裂文とは異なり、焦点要素の抜き出しがない場合でも埋め込み節全体の省略が可能であることを予測するが、実際に繫辞以下埋め込み節を全て省略することは、(26) のように可能である。

(26) A: 太郎がまた宿題を忘れたんだって

B: (僕は)[太郎がまた宿題を忘れたの]だと思っていたけどね。

次に、省略箇所に関して、IP を省略しているのではなく、VP を省略していることを示すデータを見ていく。英語の sluicing (IP-ellipsis) と VP-ellipsis では、以下のように、それぞれが島の現象と態の不一致に関して異なる性質を持つことが観察されている。

(27) 島の現象

a. Sluicing

They want to hire someone who speaks a Balkan language, but

I don't remember which [~~language they want to hire someone who speaks~~]

b. VP-ellipsis

*They want to hire someone who speaks a Balkan language, but

I don't remember which they do [~~want to hire someone who speaks~~]

(Merchant 2001)

(28) 態の不一致

a. Sluicing

*Joe was murdered, but we don't know who [~~murdered Joe~~].

b. VP-ellipsis

This problem was to have been looked into, but

obviously nobody did [~~look into this problem~~].

(Rouveret 2012)

島の現象に関しては、(27) のように Sluicing では観察されず、VP 削除の際には観察されており、また、態の不一致は Sluicing では許されず、VP 削除であれば許容される。これらをテストとして間接疑問文縮約を見てみると、以下のように VP 削除と同じ派生を見せることがわかる。

(29) a. 島の現象

太朗は花子に何かを送ってきた人を招待したらしいが、

*僕は[何を[花子に送ってきた人を招待したの]]だか知らない

b. 態の不一致

(花子が太郎に殺されたというニュースを見たが、)

僕はまさか太郎が[花子を殺したの]だと思わなかった

このことから、間接疑問文縮約の省略範囲は IP ではなく VP であり、繫辞が主要部移動によって、焦点句が焦点移動によってその削除位置から逃れ、VP が削除されていることになる。

ここまでの議論から、間接疑問文縮約における繫辞は述語位置に生起しており、焦点要素が埋め込み節から外へ移動した後に VP が省略されている、以下の構造を提案する。

(30) 僕は[_{CP} 何を₁ [_{VP} [_{IP} ~~太郎が~~_{t₁} 買ったの]_{t₂}](_だ)₂]か]知らない

5. おわりに

本稿では、まず日本語の焦点構造である、間接疑問文縮約、分裂文、ノダ文に生起する繫辞が、文法化した要素ではなく通常の述語位置に生起する繫辞であることを議論し、その後、間接疑問文縮約がノダ文から直接派生する VP 削除文であることを議論した。特に、焦点句も含めての削除が可能であることや、これまで問題とされてきた繫辞の任意性がノダ文のみで解決できることから、間接疑問文縮約と分裂文に直接のつながりはないと主張した。今後の研究では、分裂文がどのような基底構造を持ち、どのように派生するのか、格標示の有無との関連も含めて、より詳しい議論が必要である。

参考文献

- Hasegawa, Nobuko. (2011) On the cleft construction: Is it simplex or complex? *Scientific Approaches to Language* 10. 13-32. Kanda University of International Studies Center for Language Sciences.
- Hiraiwa, Ken. and Shinichiro, Ishihara. (2012) Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15.2. 142-180.
- Hoji, Hajime. (1990) *Theories of anaphora and aspects of Japanese Syntax*. MS: University of Southern California.
- Hooper, Joan B. and Thompson, Sandra A. (1973) On the applicability of root transformation. *Linguistic Inquiry* 4. 465-497.
- Hornstein, Norbert. (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*. Oxford: Blackwell.
- 井上和子. (1978) 『日本語の文法規則』東京：大修館書店.
- Kizu, Mika. (2005) *Cleft constructions in Japanese syntax*. London: Palgrave Macmillan.
- Matsuda, Yuki. (1997) A syntactic analysis of focus sentences in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 31. *Papers from the 8th student conference in linguistics*. 291-310.
- Merchant, Jason. (2001) *The syntax of silence: Sluicing, island and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- 森山倭成. (2021) In-situ focus 文の構造. 『JELS 38 (日本英語学会大会プロシーディングス)』77-78.
- 中野晃希. (2021) 主節現象と埋め込み節の In-situ focus 文. 第 59 回言語文化学会.
- Nishiyama, Kunio., John Whitman and Eun.-Young Yi. (1996) Syntactic movement of overt. Wh-phrases in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 5. 337-351.
- Nishiyama, Kunio. (1999) Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8. 183-222.
- Ross, John Robert. (1969) Guess who? *Papers from the 5th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*. 252-286.
- Rouveret, Alain. (2012) VP-ellipsis, phases and the syntax of morphology. *Natural Language and Linguistic Theory* 30. 897-963.
- Saito, Mamoru. (2004) Ellipsis and pronominal reference in Japanese clefts. *Nanzan Linguistics* 1. 21-50.
- Shimoyama, Junko. (1995) *On 'sluicing' in Japanese*. MS: University of Massachusetts, Amherst.
- Takahashi, Daiko. (1994) Sluicing in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 3. 265-300.
- Takano, Yuji. (2020) Exploring Merge: A new form of sideward movement. *The Linguistic Review* 37. 7-45.
- Terada, Michiko. (1993) Null-expletive subject in Japanese. *Kansas Working Papers in Linguistics*. 18. 91-110.